

◎家畜伝染病の防疫対策にしっかりと取り組もう。
◎放牧や粗飼料生産の準備にしっかりと取り組もう。

乳用牛

◇ 子牛及び育成牛の飼育管理

1 出生時

(1) 子牛は、生まれたらすぐに清潔で乾いた稲わらなどで体を拭き、へその緒を希ヨードチンキ等で消毒する。

分娩直後、母牛が子牛をなめる行動は、子牛の濡れた体が早く乾くだけでなく、呼吸や血液循環を促す効果がある。

(2) 初乳は、生後4時間以内に2リットル以上、12時間以内にさらに2リットルを飲ませる。母牛が血乳や乳房炎等の場合は、凍結初乳や初乳製剤を使用する。子牛が初乳を飲めない場合は、ストマックチューブを用いて強制的に哺乳する必要があるが、その際は、子牛が動いて食道や喉を傷つけたり、肺に入らないようしっかりと保定する。

(3) 初乳給与後は、乾燥した敷料を敷き詰めた子牛ペン又はカーフハッチに個別に收容し、冷気が直接体に当たらないようにする。出生直後は、気温が15℃以下になると寒冷ストレスを受けることから、必要に応じて暖房器具や保温ジャケットを利用する。

(4) 生後3日程度経過し、順調に哺乳できるようになったら、スターター（人工乳）を給与し、ルーメン絨毛の発達を促す。このとき、スターターを飼料と認識させるために、3日間程度は人為的に口に入れて味を覚えさせる。

2 哺乳時

(1) 哺乳は、朝夕2回に分けて行う。1日当たりの哺乳量は4リットルが一般的であるが、生後3週目以降は要求量が高まるため、徐々に増やしてもよい。

(2) スターターの採食量が、3日連続で1日当たり1kg以上になったら離乳させる。また、生後5週目の段階でスターターの食い込みが悪い場合は、ミルクを減らして採食を促す。

水分補給は、スターターを十分に食べさせるために重要であるが、ミルクと水（ぬるま湯）の同時摂取は、消化吸收の妨げとなるため、ミルク給与後30分以上の間隔を空けてから水（ぬるま湯）を与える。

(3) 哺乳期間は、下痢の発生を防ぐため、乾燥した敷料を十分に補充して腹が冷えないようにする。下痢の場合はミルクの給与量を減らすとともに、脱水症状を防ぐため電解質製剤をお湯で溶かし給与する。電解質製剤は、溶かすお湯の量が多すぎたり、少なすぎたりすると逆効果になるため、製品に記載された用法・用量を守る。

3 育成時

(1) 離乳後は、月齢の近い子牛同士で群飼する。疾病の予防と良好な発育を促すため、清

潔で換気の良い畜舎で飼育し、良質乾草を自由採食させる。

- (2) 濃厚飼料は、タンパク質含量の高い育成用配合飼料を給与する。下痢を防ぐため、給与量は徐々に増やす。1日当たりの給与量は、2～3kgを目安とし、朝夕2回に分けて給与する。
- (3) 育成牛の繁殖供用の目安は、月齢よりも体重・体高（体重350kg・体高125cm以上）を重視する。初産分娩24か月齢以内を目標とし、12～14か月齢で初回授精を実施できるよう、十分に飼料を食い込ませる。

4 放牧時

- (1) 放牧開始前には外気や青草に慣らすため、パドック等を利用して放牧馴致を行う。また、夏期の放牧では、直射日光を避けるスペースと飲水場所を確保する。
- (2) 公共施設に育成牛を預託する場合は、伝染性呼吸器病の予防のため、預託開始の3週間前までにワクチンを接種する。

肉用牛

◇放牧に向けた飼育管理

1 放牧馴致

放牧1か月前から徐々に運動場に出して外気や日光に当て、野外を歩き回ることによって馴れさせる。第1胃の微生物を放牧環境の餌（青草）に適応させるため2週間前から青刈りの草を徐々に給与する。放牧経験がない牛は、自分で牧草を採食することを覚えるように放牧経験牛と一緒に馴致を行う。

2 病気の予防

舎飼期に罹患している場合は、早期に治療し、回復させてから放牧する。ワクチンは、繁殖雌牛には異常産予防のための「アカバネ病ワクチン」や、気腫疽等予防のための「牛嫌気性菌5種混合ワクチン」、子牛には呼吸器病予防のための「牛呼吸器病5種混合ワクチン」を適期に接種する。

3 削蹄

舎飼期は運動量が少ないこともあり、蹄が比較的早く伸びることから、削蹄してから放牧する

豚

◇ 衛生管理

国内で豚熱が発生していることから、「飼養衛生管理基準」に基づき、農場を再点検し、特に次のことを徹底する。

- 1 部外者や車両の農場への立入りは原則として禁止し、車両等の出入りが必要な場合には消毒を徹底する。
- 2 病原体を豚舎内に持ち込まないようにするため、敷地内及び畜舎周辺を定期的に消石灰等により消毒する。また、豚舎出入口に手指消毒用アルコール及び踏込み消毒槽を

設置し、手指、靴底等の消毒を徹底するとともに、豚舎ごとに専用の作業衣・作業靴等を着用する。

- 3 農場周囲の防護柵や豚舎への防鳥ネットを設置し、野生動物の侵入や接触の防止に努め、特に、その排せつ物等が飼料や飲水に混入しないようにする。
- 4 飼料として肉を含む食品循環資源を利用する場合は、適正に加熱する（90℃60分またはそれと同等以上）。
- 5 日常の観察を徹底し、異常豚の早期発見に努めるとともに、発見した場合は、速やかに家畜保健衛生所に連絡し指導を受ける。

鶏

◇ 衛生管理

国内における今シーズンの高病原性鳥インフルエンザの発生状況から環境中のウイルス濃度が高まっていること及び昨年4月に県内家きん農場で発生したことを踏まえ、発生防止のために「飼養衛生管理基準」に基づき農場を再点検し、特に次のことを徹底する。

- 1 部外者や車両の農場への立入りは原則として禁止し、車両等の出入りが必要な場合には消毒を徹底する。
- 2 農場内に病原体を持ち込まないため、消石灰又は消毒薬による農場内における鶏舎周囲及び農場外縁部への散布を実施する。
- 3 病原体を鶏舎内に持ち込まないようにするため、鶏舎出入口に手指消毒用アルコール及び踏み消毒槽を設置し、手指、靴底等の消毒を徹底するとともに、鶏舎ごとに専用の作業衣・作業靴等を着用する。
- 4 鶏舎の天井、床、壁及び入気口の点検、補修を徹底し、野生動物の侵入や接触の防止に努め、特に、その排せつ物等が飼料や飲水に混入しないようにする。
- 5 日常の観察を徹底し、異常鶏の早期発見に努めるとともに、発見した場合は、速やかに家畜保健衛生所に連絡し指導を受ける。

草地・飼料作物

◇ 草地の適切な施肥管理

1 採草地

- (1) 早春施肥は、多雪地域では消雪後速やかに、少雪地域では牧草の萌芽前に行う。
- (2) 施肥量及び施肥配分は、年間目標収量及び刈取回数に応じて表1及び表2のとおりとする。土壌中の交換性カリ含量が18 mg/乾土100 gを超える場合はカリの施用量を減らす。
- (3) 牛尿を追肥として施用する場合は、牛尿のEC（電気伝導度）を測定し、化学肥料代替量推定値（表3）により化学肥料を減らす。

表1 オーチャードグラス主体草地の目標収量別施肥基準

年間目標収量 (生草 t/10a)	年間成分施用量(kg/10 a)				刈取 回数	施肥配分
	窒素	りん酸	加里	苦土		(早春：各刈取 後)
5	15	10	10	10	3	5 : 3 : 2
6	20	15	15	10	3	5 : 3 : 2
					4	4 : 3 : 2 : 1
7	25	17	17	10	4	4 : 3 : 2 : 1

表2 チモシー主体草地の目標収量別施肥基準

年間目標収量 (生草 t/10a)	年間成分施用量(kg/10 a)				刈取 回数	施肥配分
	窒素	りん酸	加里	苦土		(早春：各刈取 後)
4~5	10	6.7	6.7	10	2	4 : 1 または 3 : 2
					3	5 : 3 : 2
6	16	10.7	10.7	10	3	5 : 3 : 2

表3 ECによる牛尿 1m³中の化学肥料代替量推定値

肥料 成分	EC (mS/cm、25°C補正值)										
	0	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50
窒素 (kg)	0.19	0.27	0.43	0.65	0.95	1.31	1.74	2.25	2.82	3.47	4.18
カリ (kg)	0.49	1.11	1.73	2.34	2.96	3.58	4.20	4.81	5.43	6.05	6.67

2 放牧草地

収量の季節平準化をねらいとした施肥を行う。施肥量は表4のとおりとする。

表4 放牧草地の目標収量別施肥基準 (標高400m以下、スプリングフラッシュ抑制草地)

年間目標収量 (生草 t/10a)	年間成分施用量(kg/10 a)				施肥時期及び施肥配分
	窒素	りん酸	加里	苦土	
4	10	6.7	2.5	10	・年2回施肥の場合、6月上～中旬に6割、8月上～中旬に4割 ・年3回施肥の場合、早春に2割、6月中～下旬に5割、8月上～中旬に3割
5	15	10	4	10	

◇ 牧草地におけるムギダニの早期発見と防除

1 ムギダニの早期発見

ムギダニは、4月中旬頃から活動期を迎える。ムギダニの被害にあった牧草は、葉が次第に黄変し、多発した場合は枯死するので、早期発見と防除に努める。

2 ムギダニの防除

ムギダニの発生が著しい場合は、スミチオン乳剤の1,000倍液を散布し防除する。なお、散布後2週間は採草、放牧を避ける。

◇ 飼料用とうもろこし畑の準備

1 適品種の選定と種子の確保

サイレージ用とうもろこしは、本県の奨励品種（表5）の中から早晩性や作付体系を考慮し、栽培期間内で黄熟期に達するものを選択する。

子実用とうもろこしは、完熟期（子実水分 25～30%）での収穫となるため、サイレージ用とうもろこしよりも栽培期間が2～3週間長くなることを考慮し、品種を選定する。

表5 サイレージ用とうもろこしの奨励品種

品種名（系統名）	早晩性	適当な栽植密度
ゴールドデント KD421	極早生	8,000 本/10a
ゴールドデント KD090 カリス	極早生	8,000 本/10a
Z-corn950 α (ZX9595)	極早生	8,000 本/10a
パイオニア 100 日 (P9400)	早生	7,000 本/10a
パイオニア 106 日 (36B08)	早生	7,000 本/10a
LG3490 (旧：スノーデント 108)	早生	7,000 本/10a
パイオニア 108 日 (34N84)	早生	7,000 本/10a
北交 65 号	早生	7,000 本/10a
スノーデント 110 (LG30500)	早生	7,000 本/10a
パイオニア 115 日 (P1690)	中生	6,000 本/10a
パイオニア 118 日 (P2088)	中生	6,000 本/10a
クミアイデント 118N (GN1645)	晩生	6,000 本/10a

2 ほ場の準備

(1) 完熟した堆肥を4～8 t/10a 施用し、プラウ等により土壌とよく混ぜる。

(2) 碎土及び整地の良否は、播種精度、出芽揃い、除草剤の効果等に影響するので、丁寧に行う。

3 土壌改良資材の施用

(1) 石灰質資材は、土壌診断に基づき pH6.0～6.5 の酸性矯正量を施用する。

(2) リン酸質資材は、堆肥からのリン酸供給量が 10 kg/10a 以上あれば施用しなくてもよい。